

文化心理学の視座から捉える文化と幸福感研究の諸問題：
子安他論文(2012)および大山論文(2012)へのコメントにかえて

アルバータ大学心理学部

増田貴彦

(論文の要旨)

子安・楠見他(2012)および大山(2012)論文は、人々の主観的幸福感について13カ国を対象に収集したデータを、質的および量的側面から分析した研究報告である。本論文では、これら二論文の意義を述べながら、(1) 幸福感を構成する三要素(有能感・生命感・達成感)の関係と教育の役割、(2) 「幸福観」の文化普遍性と文化特殊性の問題、(3) 国際比較研究に伴う方法論的問題、の3点を議論した。

Understanding the Issues of Culture and Happiness From a Cultural Psychology Perspective: A Commentary on Koyasu, Kusumi, et al. (2012) and Oyama (2012)

Koyasu, Kusumi, et al. (2012) and Oyama (2012) applied quantitative and qualitative analysis, respectively, to data from cross-national research on the subjective happiness of people in 13 countries. The present article discusses the implications of these studies for future research with reference to the following topics: (1) the causal relationships among the three components of happiness (a sense of capability, a vital sense of life, and a sense of achievement) and the role of education in happiness; (2) cultural universals and specificities of the self-construal of happiness; and (3) some methodological issues in cross-national research.

1. 序

子安らの論文および大山論文は、人々の主観的幸福感の構造について、独自の仮説に基づいて、日本・大韓民国・中華人民共和国・南アフリカ共和国・オーストラリア連邦・ニュージーランド・カナダ・アメリカ合衆国・英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）・ドイツ連邦共和国・スペイン・メキシコ合衆国・ブラジル連邦共和国の13カ国を対象に大規模な国際比較調査をした現在進行形の研究プロジェクトの報告である。これら二論文は相互補完関係にあり、子安らの論文では、質問紙を用いたデータに基づき13カ国の幸福感の構造の量的分析およびモデル化を試みる一方で、大山論文では、分析の対象国を7カ国に絞り、量的分析では汲み取れなかった幸福感の言説を質的分析によって解明することを試みている。

評者は、カナダの教育機関に所属し、認知・知覚プロセスの文化比較を研究のテーマとしているため、この二論文の成果にコメントをするという作業は多少守備範囲外といえるかもしれない。しかしながら、文化心理学者として、こうした国際比較研究はいかに労力を費やすものであるかは身にしみて経験しており、また同時にカナダという多民族社会で生活する中で、教育の質の維持・生活の満足感・幸福感の向上という問題が、社会において極めて重要なトピック

クであると日々認識しているため、子安らの論文および大山論文のテーマ、そしてその成果の意義は十分理解できたつもりである。そこで、本コメント論文では、二論文の研究成果を評価しつつ将来的に検討すべきと思われる点を述べたいと思う。

2. 幸福感を構成する三要素と教育の役割

子安は先行論文において、人間は教育というものを通じて知識と技能を獲得し、自分が何事かをなすことができるという「有能感」を得、このことは自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという「生命感」を得ることにつながり、さらに、この二つの感覚を一定の目標に向けて十全に発揮することにより、何かを成しえたという「達成感」を感じ、そしてこれらの感覚が「主観的な幸福感」の根幹にあるという議論を行っている（子安, 2012）。今回の研究でも以上の仮説に基づき、それぞれの要素の役割を共分散構造分析を用いたモデルを呈示しつつ議論している。こうした幸福感についての新たな仮説の妥当性を大規模な国際比較調査を通して探り、幸福感モデルを構築するという構想は、非常に意義のある試みである。

しかし、今回は13カ国の比較研究という大規模な質問紙研究という制約もあってか、これら三要素は「幸福感」を形成する構成要素として平等に扱われており、三要素間にいかなる因果関係がある

かについての議論は十分述べられていなかった。評者は、この点について是非継続して研究がなされることを期待しつつ、この問題を解明するためには、質問紙調査研究のみならず、実験手法を用いた研究もひとつの可能性をもっているのではないかと考える。例えば、対象となる文化の参加者を、「有能感」を感じさせることができる課題に従事するグループと「統制」グループに分け、「有能感」を感じたグループは統制グループに比べ「生命感」を感じるが多くなるのかを調査することも可能であろう。

一方、大山論文が、筆者自身が述べるように、三要素にこだわらず量的分析で抜け落ちた部分を探るということに主眼を置いていることは、子安論文を補完する意味で評価できるところである。そのため、分析の際のコーディングは具体的な回答に即して行われ、「生命感」は一つの分類コードとして用いずに「家族」「重要な他者」「一緒にいる」などに細分化して分析する一方、「達成感」「充実感」は逆に同一コードとしてまとめた分析をおこなっている。しかしながら、あえて三要素を基準に大山の質的データの結果を考えた場合、たとえばテキストマイニング・共起ネットワークの分析では、他者と時間を共有する、あるいは他者と共同のアクティビティに従事するという表現の違いが欧米文化圏、中米文化圏、東アジア文化圏の間にあるものの、人々の意識に上る「幸せな時」というイメージの

大半が、主に「生命感」という枠で括ることができるコード群が回答のなかでも一番大きな比率を占めていたと解釈できる。この点は、幸福感を構成する三要素の役割を解明する差異にはそれぞれの要素に異なった重み付けをしなければいけない可能性を示していると言えるだろう。今後、質的・量的データの補完関係を有効に利用しながら、さらなる理論の精緻化を望みたいところである。

次に、幸福感に関わる教育の役割についても一言述べたい。評者は、子安らが、心理学・教育学にまたがる極めて重要なテーマ「教育と幸福」についての質問項目を含めていたことは十分評価している一方で、幸福感に影響を及ぼす教育の役割については、さらに具体的な議論を聞きたいという印象をもった。たとえば、各国の人々が「教育」の項目に回答する際にイメージしていたのは、教育期間の長さや学歴の高さというレベルに関する事なのか、計算能力などより具体的な問題解決能力に関する事なのか、あるいは、本特集で楠見（2012）が論じるように、人生における経験によって獲得される深く広い知識と理解に支えられた高い水準と価値を実現した知性—叡智—に関する事なのだろうか？そして、幸福感の三要素それぞれに対し教育はどのような役割を担っているのだろうか？

今回のモデルでは、学歴というデモグラフィック変数が、教育という媒介変数を介して、三要素から構成される潜在変数としての幸

幸福感に及ぼす効果について議論されているが、より具体的な意味での教育経験が個々の要素にどのような効果を持つのかについては更なる議論を聞きたいところである。たとえば就学期間の長さは「有能感」に影響を及ぼすのであろうか？また、「生命感」をより強く感じるためには人々に叡智が育まれていることが必要なのだろうか？そして「達成感」を感じるためには、学校教育は具体的にどのようなカリキュラムを設定すべきなのだろうか？こうした問いに答えることは、本研究を教育の現場に生かす上でも重要なことと思われる。たとえば、高等教育を受ける期間を考えると、子安（2012）は、日本における年齢別進学者数を当該の年齢人口で割った値の合計で算出される値は、OECD諸国の中で平均以下であるという（Education at a Glance, 2011）。子安はこの結果を、他の国で高等教育に就学している学生の年齢が、概して日本のそれに比べて高いという点に起因すると論じているが、もしそうであるならば、日本において高等教育への就学年齢が上昇することは、今回の日本データで低い値であった「有能感」を変化させる一要因になりうるかもしれない。

「有能感」「生命感」「達成感」という幸福にかかわる三要素間の因果関係と重み付け、これら三要素に関わる幅広く具体的な教育の要因の因果関係、そして最終的にはこれら研究成果がどのような教

育政策案を提案してくれるのかについて、今後の研究において更なる報告を期待したい。

3. 幸福感の普遍性と文化特殊性：東アジア的「幸福観」について

本節では、文化心理学の知見から、東アジア文化圏で歴史・文化的に共通する「幸福の定義—幸福観」というものが、今回のような結果を導き出している可能性に言及しながら、幸福感の普遍性と文化特殊性について議論する。

文化心理学では、文化を「ある集団が歴史を通じて築いた慣習および公の意味体系の総体である」として捉えて、文化と心の相互構築プロセスを研究対象としている（北山，1998）。この視点を、子安らのテーマに当てはめれば、人々の幸福感の背後にある「幸福とはいかなるものか」「人生において幸福感を感じるものがどれだけ重要であるか」という命題についてそれぞれの文化で育まれた意味体系—「文化的幸福観」—を考慮に入れた理解が必要であると考える（内田・荻原，2012； 増田・山岸，2010）。

文化心理学の過去の知見によれば、欧米文化圏では、アメリカ独立宣言にもみられるように、幸福の追求を人間の権利を考える上で最も重要なものと捉える傾向があり、同時に、そこでイメージされる幸福感とは、自らの自尊心の維持とも結びつく積極的なものと理解され、さらに付随する感情経験も、エキサイトメントなどのより

覚醒度の強い感情が想定されがちである（大石，2009）。これに対して、東アジア文化圏においては、覚醒度の強い感情を想定するよりも、平和で穏やかな感情を想定することが多いことも指摘されている（Tsai, Miao, Seppala, Yeung, & Fung, 2007）。こうした傾向の背後には、「人生楽ありや苦もあるさ」「人間萬事塞翁馬」「禍福は糾える縄の如し」といった幸福と不幸とを弁証法的に捉えようとする幸福観（Kitayama & Markus, 1999; Peng & Nisbett, 1999 Bagozzi, Wong, & Yi, 1999; Uchida & Kitayama, 2009）、人間が一生で経験できる幸福には限りがあるから、それを惜しんで使うべきである—「惜福」—という幸福観（Koo & Suh, 2007; Suh & Koo, 2008, 幸田, 1940）、「人の値打ちと煙草の味は、煙になって判るもの」という言葉にあるように、死んだ後になってその人の人生を云々すべきという人生観（増田・山岸 2010）など、物事への諦観を示しながら、幸・不幸を包括的・関係的に捉える儒教思想、仏教思想、老荘思想そして陰陽思想の影響が指摘されている。

人々の主観的幸福感の評定にそれぞれの文化における幸福観が影響を与えている可能性についてはいくつかの実証研究がある（Oishi, 2002; Rice & Steele, 2004）。例えば大石（2002）は、ヨーロッパ系とアジア系のアメリカ人に、まず一週間の間、日々の満足度を判断してもらい、その後一週間を振り返って、その週の満足度を判断

してもらった課題を課したところ、日々の満足度では2つのグループに差が生じていなかったにもかかわらず、一週間を振り返った際には、ヨーロッパ系アメリカ人はアジア系アメリカ人よりも、満足度が高かったという結果を得ている。大石はこの結果について、人々の感じる主観的幸福感は、日々意識的に思い出される個別の出来事によって判断するというよりは、人々が人生あるいは幸福とは何かに対して持っている定義に依拠しながら回答している可能性が高いと論じている。つまり、アジア系アメリカ人は、よい事も悪いこともあった一週間を、自らの幸福観に照らし合わせて、評価したのに対し、ヨーロッパ系アメリカ人は、よい事も悪いことも経験したにもかかわらず、幸福は追求するものであるという幸福観に照らし合わせて、よい経験をしたことに注意をむけ、この一週間は満足だったという判断を下したのではないかということである。

「文化的幸福観」を考慮に入れた研究は、心理プロセスの文化特殊性を考える研究者のみならず、普遍的な幸福感の構造のモデル化を目指す研究者にとっても、どの文化でも通用する尺度を選んで国際比較研究を進める上で必要になろう。この点について、子安らがアメリカ産の尺度（Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985）に加え、日本で作成された「人並みの幸福感」尺度（Hitokoto, Uchida, Norasakkunkit, & Tanaka-Matsumi, 2009）をモデルに含めていた

ことは評価できる。たとえば、子安らの結果では、大韓民国・日本で、多くの幸福感項目の回答の値が他国のそれよりも低いにもかかわらず、人並みの幸福感の値のみ他国と肩をならべている。このことは、一方で、日本や大韓民国における幸福感が先に述べた文化的幸福観の影響を受けていることを裏付ける結果である同時に、他方で、多くの国々において「人並み幸福観」の質問項目のほうがアメリカ産の尺度よりも普遍的に理解可能なものであったことの裏付けであると捉えることもできよう。実際、今回発表されたモデルでも、幸福感を感じると人生満足度が高くなるという関係の背後に、人々に共有された人並みの幸福感があり、これが先の二変数の影響関係を説明する真の要因となっているという式が用いられている。もしそうであるならば、この尺度は、今後文化普遍的な幸福感の構造を探る上で極めて重要な役割を担うことになると考えられる。

こうした文化的幸福観の分析の重要性が、大山論文ではすでに考慮にいれられていたことは望ましいことである。大山論文の目的は、数量的結果からは見えてこない各国の幸福観の普遍性と文化特殊性を探ることであった。この結果を概観すると、まず、カテゴリーコーディングの結果から明確にわかる幸福観の普遍性としては、「共存」という言葉で分類された幸福観が、それ以外の幸福感、特に「経済」という言葉で分類された幸福観をはるかに上回っていたことが

あげられる。この点については、経済的豊かさが国民の幸福感を説明するわけではないという結果（Easterlin, 1974）、物質的豊かさの追求は人々をむしろ不幸にする一方で、人間関係の豊かさが人々の幸福感の源泉になっているという指摘（Lyubomirsky, 2007）、友人と頻繁にコンタクトを取っていることが人生の満足度と強い相関関係にあるという指摘（Myers, 1999）と一致している。もちろん、次節で詳しく述べたように、こうした回答には、どのような回答が社会的に望ましいか、あるいは規範的であるかといった点が反映していることも考えられる。しかし、今回の結果を、人々が幸福感・幸福観について考えている日々の思考の直接的な反映と捉えるならば、今回の結果は「人間関係」に主眼をおいた幸福感研究が必要であることを示唆していると理解することができよう。

大山論文は、さらに幸福観の文化特殊性を吟味する上でも、興味深い結果を報告している。たとえばアメリカのデータで、態度という項目が全体の回答の中で占める比率が大きかったことについて、「幸福」に対する主体の能動性が示されているという大山らの解釈は、過去の文化心理学の知見（大石, 2009）に照らし合わせて一貫している。また、日本では特に「平安」が幸福観を考えるうえで重視されているという結果も興味深い。この点について大山は、各国の犯罪率について言及し、日本が他国に比べて平安を望めば得られ

るため、あるいは日本人がリスクを冒さないことを重視するためと解釈されているが、評者は、子安らが用いた人並み幸福感の値が日本で高かった事実や、過去の文化心理学の知見で、日本人にとっての幸福観は、他の文化圏のそれに比べ、平和で穏やかな感情として認識され、より包括的な理解をされていることと関係している可能性も捨てがたいと考える。「平安」というカテゴリーに入ったデータが、治安の問題についてより多く言及しているのか、穏やかな幸福感についてより多くの言及をしているのかは、今一度詳細に分析してはいかかと思う。

以上、子安らの論文で論じられている客観的指標としての「幸福度」と主観的指標としての「幸福感」の測定に加え、大山論文で試みられたような、それぞれの国々の人々が共有している「幸福観」の測定を3つのセットとし、文化の普遍性・特殊性の両面を考慮に入れた理論的枠組みの必要性を、今後の国際比較研究への提案としたい。

4. 自己記述尺度を用いた国際比較の方法論的問題

子安らの論文および大山論文で報告された大規模な国際比較研究の機会はなかなか得られるものでなく、その価値は現在まで継続されて行われている世界価値調査のプロジェクト（Inglehart, Foa, Peterson, & Welzel, 2008）やディーナーらの人生の満足度の調査

プロジェクト (Diener, Diener, & Diener, 1995) に匹敵するという点で極めて意義のある研究である。

本節では、こうした点を評価しつつも、自己記述尺度に必然的に伴うバイアスを述べながら、今一度、直接的な平均値の比較解釈が慎重に行われるべきことを述べたい。まず第一点は、過去のデータにおいて国ごとの平均値の比較は示されているが、その結果はデータが採集された年や時期によって、あるいはサンプル集団の性質によって変動が大きい故に解釈が難しいということがあげられる。たとえば世界価値調査の一項目「あなたは幸福ですか？」という質問に対する、継続した調査研究で蓄積された各国の幸福感の平均値を見た場合、日本(177.2, 2005年)、韓国(174.8, 2005年)、中国(153.1, 2007年)が欧米諸国に比べて低いという結果は、過去に行われた文化心理学研究の行動データとも整合性があるが、今回の中国のデータがクラスター分析において、日本や韓国よりもむしろ、欧米文化圏のデータにむしろ似通っているという点は詳細な解釈が必要である。また、同じ欧米諸国でも、ドイツ(165.5, 2006年)は欧米諸国ながら値は低い、子安らのデータではこの点は異なる。さらに、ブラジルの値(172.3, 2008年)やメキシコの値(158.8, 2008年)は、子安らの論文で指摘されているほど高くはない一方、他の研究報告では南米文化圏では一般的に、幸福感が高いことも指摘されて

いる (Inglehart et al., 2008) という子安らの報告を支持する結果もある。こうした結果が得られる原因としては、南米諸国では他者との親密な関係を結ぶことで豊かな情緒が育まれるのではないかという議論はなされているものの (Diener, 2001)、一定の見解はまだ定まっていない。つまり、こうした大規模なデータ収集には利点がある一方で、毎回採集されたデータを元に解釈がやり直されるといいう脆弱性があるということを経験したうえで解釈が必要になるといいうことである。

こうしたことに付け加え、自己記述データに伴いうるバイアスについてもここで述べておきたい。まず第一に自己記述による回答の場合、回答者が回答に自らの態度や価値観を直接反映させるのではなく、周囲の他者と自らを比較することによって、「自分は周囲の人に比べて～である」という相対的な判断するバイアス (the reference-group effect) が生じる可能性が指摘されている (Heine, Lehman, Peng, & Greenholtz, 2002)。この点を考えると、中国をはじめとしたいくつかの国の回答者の学歴が、実際の平均学歴をはるかに上回っていたという点も無視することはできず、たとえば高い学歴を得ることの出来た層の回答者が当該の文化において望めた職業選択の自由度などが、幸福感の判断にかかわっている可能性もありうる。とりわけ、中国のデータは、果たして過去の文化心理学

研究ではまだ計測しきれていない東アジア地域（日本・韓国・中国）の文化圏内差異を示す結果であるのか、それとも近年の中国において経済発展や中国独自の政策が幸福感あるいは幸福観に変化をもたらしている兆候であるのかは、是非見極めて欲しい。

そして平均値の報告と平行して、それぞれの国において各変数間の関係を重視した報告は国際比較研究には必須のこととなろう。たとえばディーナーらの国際調査では、直接的な平均値の比較よりも、人生の満足度とそれ以外の説明変数との関係についての比較に重点をおき、それぞれの国ごとに概念構造を探るという手法をとっている（Diener & Diener, 1995; Suh, Diener, Oishi, & Triandis, 1998）。子安らの論文でも、幸福感の構造の分析を試み、設定されたモデルの潜在変数間の関係が、各文化ごとあるいはクラスター化された国ごとの数値も表記されているが、クラスターごとでどれくらい類似しているか、あるいは異なるかについての議論は可能なはずであり、今後の追加報告を知りたいところである。

さらに、大山の研究で用いられた自由記述法も、各国の人々から具体的な回答が得られる利点は多い一方で、こうした価値観に関わるデータに必然的に入り込むバイアスには注意が必要である。たとえば、質問文の等価性、翻訳やコード化の信頼性や妥当性はその筆頭にあがるであろうし、回答者のバイアスに関しても価値判断の際

に日常生活で欠乏していることに重きをおいて言及する傾向（the deprivation effect—Peng, Nisbett, & Wong, 1997）、逆に社会的序に望ましい発言をしがちであるという傾向（social desirability）、など枚挙に暇がない。こうした傾向がそれぞれのデータにどの程度入り込んでいるか考慮に入れながら、結果の解釈をすることは至難の業であり、態度や価値観を測定すると同時に実際の行動データを測定・収集することで整合性を論じる以外いまだ有効な方法はないといえる。たとえば、イギリスでは「平安」が幸福観を考える上で重視されていないのは、日常生活で平安が保障されているからあえて発言されなかったのか、穏やかなレベルでの幸福感では幸福の定義の言説に載せるには弱すぎるので発言されなかったのか、あるいは大山の述べるように「平安」は当該の社会において望み得ないから発言されなかったのかの線引き、あるいは欧米文化圏内での差異、東アジア文化圏内での差異が、果たして過去の研究枠組みでは計りきれいでなかった本質的な差異なのか、自由記述という手法を取ったが故のバイアスなのかは、将来的に行動データを含めた上での慎重な判断を要するであろう。

今回の調査は、子安ら、大山ともに国ごとという単位で分析を行った国際比較調査であることを銘打っており、こうした潜在的なバイアスが入り込むことを十分に想定していることが伺えるが、こう

したバイアスをできるかぎりコントロールした上での分析や慎重な解釈をする必要性はいくら言っても言い過ぎることはないだろう。そして、もし過去の文化心理学の知見では汲み取られていなかった同一文化圏内の差異（例えば日本と韓国、あるいは英国と米国など）を見出したのならば、その差異を説明する新たな理論的枠組みと、その枠組みから予測される行動パターンが実証データの積み重ねによって示されることを望みたい。そうしたデータ報告は、研究成果を利用する側にとってもより有意義なものになるであろう。

5. 結論

子安論文の意義をまとめるとすれば、独自の仮説に基づいて幸福感に関する諸々の変数の関係についてのモデルを示すことで、今後の幸福感研究に新たな道標を示したことであろう。また、大山論文の意義をまとめるとすれば、幸福感を規定する要因と、不幸福感を規定する要因が、必ずしも単純な相反関係にあるのではないと想定し、それぞれの要因について適切な手法を用いた分析を試みた点、そして、評者が、本コメント論文で述べた「幸福観」研究の必要性をすでに研究の構想に入れ、それぞれの文化圏で主流となっている「幸福観」の特徴を描き出そうとした点であろう。今後このデータに基づき、幸福感を構成する三要素そして幸福感と教育の因果関係の更なる分析をし、同時に今回示されたモデルの普遍性と特殊性の検討

をし、さらに調査に伴うバイアスの可能性を十分に考慮に入れた報告結果が継続的に発表されることを期待したい。また、できることならば文化心理学における理論的枠組みを検討しつつ、さらにそれを超克し、一方で各国の人々に共通の幸福感とはなにかを探ると同時に、他方で同一文化圏内での差異を説明する新たな理論的枠組みを示してくれることを望みたい。

【謝辞】

本コメント論文を作成するにあたり、ヴァージニア大学の大石繁宏准教授には、国際比較研究の最新の動向についての貴重な意見をいただきことをここに報告すると同時に御礼申し上げます。

文献

- Bagozzi, R. P., Wong, N., & Yi, Y. (1999). The role of culture and gender in relationship between positive and negative affect. *Cognition and Emotion, 13*, 641-672.
- Diener, E. (2001, June 14-17). *Culture and subjective well-being-Why some nations and ethnic groups are happier than others*. Invited address presented at 13th Annual Convention of the American Psychological Society, Toronto.
- Diener, E. & Diener, M. (1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology, 68*, 653-663.
- Diener, E., Diener, M., & Diener, C. (1995). Factors predicting the subjective well-being of nation. *Journal of Personality and Social Psychology, 69*, 851-864.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment, 49*, 71-75.
- Easterlin, R. A. (1974). Does economic growth improve the human lot? In P. A. David and M. W. Reder (Eds.), *Nations and households in economic growth: Essays in honor of Moses Abramovitz*. New York:

Academic Press.

Education at a Glance 2011:OECD Indicators: <http://www.oecd.org>.

dataoecd/61/33/48631070.pdf

Heine, S., Lehman, D. R., Peng, K., & Greenholtz, J. (2002). What's wrong with cross-cultural comparisons of subjective Likert scale: The reference-group problem. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 903-918.

Hitokoto, H., Uchida, Y., Norasakkunkit, V., & Tanaka-Matsumi, J. (2009). *Construction of the Interdependent Happiness Scale (IHS): Cross-cultural and cross-generational comparisons*. Poster presented at the 21th Association for Psychological Science, San Francisco, USA.

Inglehart, R., Foa, R., Peterson, C., & Welzel, C. (2008). Development, freedom, and rising happiness: A global perspective (1981-2007). *Perspectives on Psychological Science, 3*, 264-284.

Koo, J., & Suh, E. (2007). Is happiness a zero-sum game? Belief in fixed amount of happiness (BIFAH) and subjective well-being. *Korean Journal of Social and Personality Psychology, 21*, 1-19.

幸田露伴 (1940). *努力論* (岩波文庫) 岩波書店

楠見孝 (2012) 幸福感と意思決定：決定スタイルと制御モードの文

化差 心理学評論, XX, XX-XX.

北山忍 (1998). 自己と感情:文化心理学による問いかけ. 共立出版

Kitayama, S., & Markus, H. R. (1999). Yin and yang of the Japanese self: The cultural psychology of personality coherence. In D. Cervone & Y. Shoda (Eds.), The coherence of personality: Social cognitive bases of personality consistency, variability, and organization (pp. 242–302). New York: Guilford Press.

子安増生 (2012) 幸福感を支える「教育の力」. 子安増生・杉本均
編 幸福感を紡ぐ人間関係と教育 (pp. 3-21) ナカニシヤ出版

Lyubomirsky, S. (2007). The how of happiness. New York: The Penguin Press.

増田貴彦・山岸俊男 (2010) 文化心理学 (上巻) 培風館.

Myers, D. G. (1999). Close relationships and quality of life. In K. Kahneman, E. Diener, & N. Schwarz (Eds.), Well-being: The foundation of hedonic psychology (pp. 374-391). New York: Russell Sage Foundation.

Oishi, S. (2002) The experiencing and remembering of well-being: A cross-cultural analysis, Personality and Social Psychology Bulletin, 28, 1398–1406.

大石繁宏 (2009). 幸せを科学する 新曜社.

- Peng, K., & Nisbett, R. E. (1999). Culture, dialecticism, and reasoning about contradiction. *American Psychologist, 54*, 741-754.
- Peng, K., & Nisbett, R. E., & Wong, N. Y. C. (1997). Validity problems comparing values across cultures and possible solutions. *Psychological Methods, 2*, 329-344.
- Rice, T. W. & Steele, B. J. (2004). Subjective well-being and culture across time and space. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 35*, 633-647.
- Suh, E. M., Diener, E., Oishi, S., & Triandis, H. C. (1998). The shifting basis of life satisfaction judgments across cultures: Emotions versus norms. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 482-493.
- Suh, E. M., & Koo, J. (2008). Comparing subjective well-being across cultures and nations: The “what” and “why” questions. In M. Eid & R. J. Larsen (Eds.), *The science of subjective well-being* (pp. 414-427). New York, NY: Guilford Press.
- Tsai, J. L., Miao, F. F., Seppala, E., Yeung, D., & Fung, H. H. (2007). Influence and adjustment goals: Sources of cultural differences in ideal affect. *Journal of Personality and Social Psychology, 92*, 1102-1117.

内田由紀子・荻原祐二（2012）文化的幸福観：文化心理学的知見と

将来への展望 心理学評論 *XX*, XX-XX.

Uchida, Y., & Kitayama, S. (2009). Happiness and unhappiness in east

and west: Themes and variations. *Emotion*, *9*, 441-456.